九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

東北大学文学部「現代日本学概論Ⅱ」（2 年生以上）授業実践報告

茂木, 謙之介
東北大学文学研究科 : 准教授

https://hdl.handle.net/2324/4842489

出版情報：オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.106-106, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

東北大学文学部「現代日本学概論Ⅱ」(2 年生以上)授業実践報告

茂木謙之介

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本講義は「現代日本学の方法」と題し、主に日本学の初学者を対象として、文化研究の基礎的な方法論について概説するものである。具体的には「メディア」「表象」「言説」をキーワードとして、文化研究の方法としての批評理論を紹介し、具体的な検討を通して理解を図ることを目的としている。

批評理論は、文化研究の学習を考える際に先行論文を精読・理解する重要な参照項となるため、本講義では理論そのものの紹介を行うとともに、映像作品を含む実際の複数のテクストを事例に分析の具体例を示すことで受講者の理解を深めることを予定していた。

対面授業前提であったシラバス作成当初は以下の進行を想定していた。

第 1 回 イントロダクション／第 2 回 日本学の歴史／第 3 回 歴史と物語①／第 4 回 歴史と物語②／第 5 回 メディア①／第 6 回 メディア②／第 7 回 表象①／第 8 回 表象②／第 9 回 言説①／第 10 回 言説②／第 11 回 実践①／第 12 回 実践②／第 13 回 実践③／第 14 回 実践④／第 15 回 まとめ

しかし、シラバス公開後に遠隔授業での実施を要請されたため、特に映像作品を使用する予定だったものについては変更を余儀なくされ、そのため「実践」に関わる部分を圧縮せざるをえず、全体的に批評理論について広範囲にわたって解説する形に切り替えた。変更後の進行は以下の通りである。

第 1 回 イントロダクション／第 2 回「メディア」「表象」「言説」から考える／第 3 回 批評理論の歴史／第 4 回 物語論①／第 5 回 物語論②／第 6 回 脱構築批評／第 7 回 メディア論／第 8 回 表現の不自由／第 9 回 アダプテーション／第 10 回 翻訳論／第 11 回 歴史と物語／第 12 回 文化研究の思考／第13回 ジェンダー批評／第14回 ポストコロニアル批評／第15回 まとめ

毎回の授業は、基本的にパワーポイントで解説を行い、学生からのリアクションペーパーを回収し、翌週それに応答しつつ進行する予定であった。大学からは基本的に Google Meet を使用することを要請されたため、本授業は予定通りパワーポイントを共有しつつリアルタイム授業を展開し、受講者に許可を取ったうえで録画、オンデマンド教材として Google Classroom にアップロードした。学生からのリアクションペーパーは Google Classroom で授業後 6 日以内で提出を要請した。これによってリアルタイムでは受講の叶わなかった授業の動画を後から視聴し、リアクションペーパーを提出することが出来るため、遠隔授業における受講者各人の適性に合わせることができると考えた。

学習の到達目標には「現代日本学の方法について理解し、適切に対象を論じられるようになること」を設定し、成績評価には「出席状況や課題レポートを総合的に評価すること」を設定しており、これらは変更なく実施した。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

前述の通り授業そのものは質疑などの時間を除いて基本的に一方向的な講義形式であったため、リモートであっても当初の目的の大部分は達せたと考えられる。とりわけ授業の録画とそのアップロードという方法を採用したことにより、実質的にオンデマンド授業を選択肢として用意できたことは積極的に評価できるものと考える。たとえリアルタイムで受講していたとしても通信状況が悪化した場合などには学習機会が奪われる可能性はあるし、また対面授業の場合でも当日の体調などで受講が叶わない場合などもあるだろうが、オンデマンド化はそこを補う可能性をもつといえるだろう。リアルタイムで視聴していた受講生からは、つい聞き逃したり、意味がつかみきれなかったりした部分について復習的に動画を視聴することで補うことが出来るという点について好意的に評価する声が寄せられた。

なお、授業内容に関わる問題点としては著作権の問題が残っている。当初予定していた授業での動画視聴が難しかったのは偏にそこに関わっており、その解決は今後の課題である。